



幻の鶴舞藩

近代の夜明け

鶴舞の歴史

目次

1. 鶴舞藩の生い立ち
 - 1-①. 江戸幕府の終焉
 - 1-②. 藩の変遷
 - 1-③. 井上氏の転封変遷
 - 1-④. 所領
2. 桐木原(切木)台地の開拓
 - 2-①. 切木の七軒屋
 - 2-②. 開墾と整地、字、町名命名
3. 鶴舞陣屋
 - 3-①. 陣屋と知事邸
 - 3-②. 陣屋周辺
 - 3-③. 城下町のなごり
 - 3-④. 浜松への思い
4. 鶴舞藩の体制
 - 4-①. 藩庁体制
 - 4-②. 兵制改革
5. 克明館
6. 鶴舞神社
7. 偉業と称される刊行書
8. 鶴舞藩の女性を中心にした伝統文化
9. 鶴舞城下町の変遷
 - 9-①. 鶴舞藩出身の旧士族
 - 9-②. 町内会(部落)の名前の謂
 - 9-③. 鶴舞町の商店街
 - 9-④. 漸減する城下町の人口
10. 鶴舞藩二年十ヶ月の治績
11. 鶴舞藩出身の人物
12. 写真で見る鶴舞町
 - 12-①. 鶴舞の町(公園からの眺め)明治初期
 - 12-②. 鶴舞の町(公園からの眺め)平成
 - 12-③. 元町通り
 - 12-④. 南町通り
 - 12-⑤. 元町を歩く芸妓連(深川芳町)
 - 12-⑥. 平成の鶴舞公園の賑わい
 - 12-⑦. 平成の鶴舞公園の賑わい
 - 12-⑧. 小湊鉄道上総鶴舞駅
13. 参考文献資料等

1. 鶴舞藩の生い立ち

1-① 江戸幕府の終焉

1. 国際社会

- ・西洋では、蒸気機関を先頭とする技術革新をおこない産業革命を遂行推進し、資本主義社会を創り出した。
- ・戦艦への蒸気機関導入、海軍砲の破碎弾・施条砲等、驚異的な軍事改革による欧米列国のアジア各国への進出。
- ・2度にわたるアヘン戦争での大清帝国の敗戦。
- ・日本への開国要求。

2. 国内

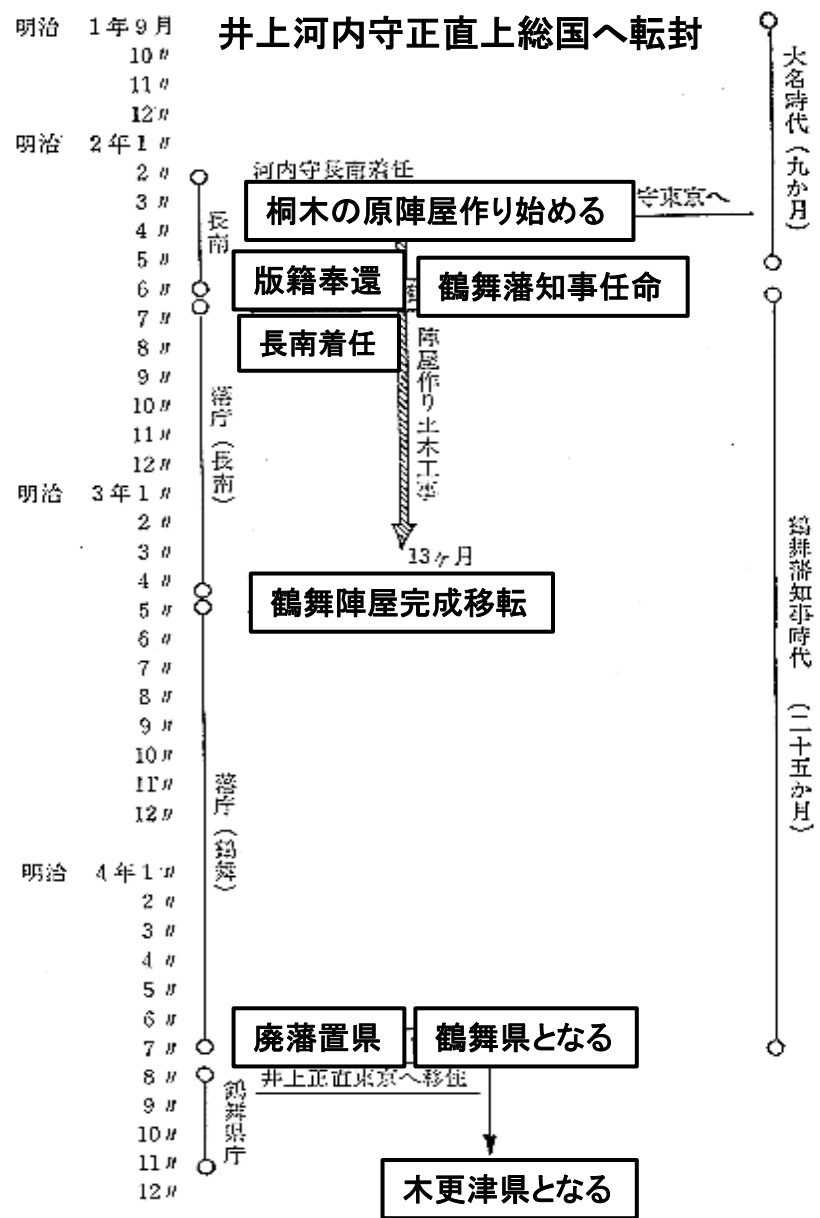
- ・江戸幕府はアヘン戦争の容易ならざる事態を察知、薪水給与令を発し、ビートル、ペリー艦隊の開国要求に苦慮、最終的には欧米各国と条約が結ばれた。
- ・ハリスによる日米修好通商条約が「無勅許」により締結され、一挙に世界資本主義の中に編入された。欧米軍事圧力により江戸幕府は屈服され、開港を余儀なく受け入れ、幕府の権力は失墜した。
- ・開港が引き起こした薩英戦争、四国連合艦隊下関砲撃戦争、長州征伐の失敗、薩長軍事同盟と大政奉還、王政復古と戊辰・箱館戦争により、新政府が確立した。
- ・鳥羽伏見戦争で敗北した徳川慶喜は、大坂から江戸へ帰着するが、幕府という国家はあえなく崩壊、政治革命が実現した。
- ・新政府の旧幕府への処置は、第16代将軍徳川家達を静岡70万石の大名へ、江戸の旗本御家人の屋敷は総て明渡しとなり、これでは5000世帯の扶持しか手当出来ず、駿河・遠江で悲劇が繰り返された。これにより、駿河・遠江の在藩は房総各地へ転封となった。駿河の沼津藩(水野忠敬5万石)は菊間藩へ、田中藩(本多正納4万石)は長尾藩(白浜、後に北条)へ、小島藩(滝脇信敏1万石)は上総金ヶ崎藩(桜井藩)へ、遠江の横須賀藩(西尾忠篤3万5千石)は花房藩(鴨川花房)へ、掛川藩(太田資美5万3千石)は柴山藩(後の松尾藩)へ、浜松藩(井上正直6万石)は鶴舞藩へ、相原藩(田沼意尊1万石)は小久保藩(天羽郡)へ移封となった。

1-②.藩の変遷

明治新政府は、徳川宗家に対する処置で第16代将軍徳川家達を駿河・遠江に封じ七十万石を与えた。この為、駿河・遠江内の7藩の大名が房総の国へ移封となってしまった。明治元年、遠江国浜松藩主井上河内守正直は、上総国へ領地替え(転封)を命ぜられ、藩鶴舞藩は誕生した。

- ・明治元年九月五日付で、領有知行:6万9千余石
 - *上総の国(6万2270石、房総知県事柴山文平の支配地であった)
 - 市原郡 - 108村 埴生郡 - 48村 長柄郡 - 42村 山辺郡-8村
 - *播磨の国二郡(6800石) *柴山文平:元久留米藩士、上総・安房支配
- ・明治元年12月15日: 行政官より「領地替えに付、城もない場所へ移され費用もかかり難儀であるから」と玄米千二百石、金一万八千両宛三カ年間下賜するとの通達を受ける。
- ・明治元年12月16日: 柴山文平が領地を井上河内守正直に引渡し。
- ・明治2年1月27日: 浜松城出発
 - 2月11日: 上総国埴生郡長南町矢貫村へ赴き、仮本営は今関勘四郎宅、仮庁舎は三途台の長福寿寺→浄徳寺
 - 3月12日: 市原郡内田郷石川村地内桐木原への仮陣屋作りの許可を受け開墾着手
- ・明治3年4月17日: 村々へ桐木原へ移る旨通達
 - 21日頃: 陣屋の完成を待って矢貫村の藩庁を鶴舞桐木台に移して居住、約7百戸

この間、明治2年の版籍奉還により井上侍従正直鶴舞藩知事となって明治4年の廃藩置県まで行政をおこなった。



3年10月の鶴舞藩一覧表 (小幡重康作)

1-③.井上氏の転封変遷

代名	井上藩主・居城	生没年	享年	居城	城地	期間
1 正就	天性5 寛永5	52	横須賀城	元和9 正保5	22	
	(1577~1628)			(1623~1645)		
2 正利	慶長11 延宝5	70	笠間城	正保2 元禄5	47	
	(1606~1675)			(1645~1692)		
3 正任	寛永7 元禄13	71	郡上城	元禄5 元禄10	5	
	(1630~1700)			(1692~1697)		
			龟山城	元禄10 元禄15	5	
				(1697~1702)		
4 正岑	承応2 享保7	70	下館城	元禄15	0	
	(1653~1722)			(1702)		
			笠間城	元禄15 延享15	45	
				(1702~1747)		
5 養子	元禄9 元文2	42	岩城平城	"		
正之	(1696~1737)					
6 正径	享保10 明和3	42	新領13郡	延享4 宝暦6	9	
	(1725~1766)			(1747~1756)		
			新領13郡	宝暦6 宝暦8	2	
				(1756~1758)		
			浜松城	宝暦8 文化14	59	
				(1758~1817)		
7 正定	宝暦4 天明6	33	"	"		
	(1754~1786)					
8 正甫	安永4 文政3	46	棚倉城	文化14 天保7	19	
	(1775~1820)			(1817~1836)		
			舘林城	天保7 弘化2	9	
				(1836~1845)		
9 正春	安永4 文政3	42	浜松城	弘化2 明治1	23	
	(1806~1847)			(1845~1868)		
10 正直	天保8 明治37	68	"	"		
	(1837~1904)		鶴舞城	明治1 明治4	3	
				(1868~1871)		



1-④.鶴舞藩の所領

・領有知行:6万9千余石

上総の国(六万二千二百七十石、房総知県事柴山文平の支配地であった)

市原郡のうち - 108村(旧幕府領1村、旗本領16村、久留里藩領5村、高岡藩領7村、佐貫藩領3村、鶴牧藩領1村、館山藩領1村、安房上総知県事領84村、内訳は旧幕府領7村、旗本領68村、与力給地1村、請西藩領8村、鶴牧藩領7村、岩槻藩領5村、佐貫藩領1村、西大平藩領1村)

埴生郡のうち - 48村(旧旗本領5村、久留里藩領1村、鶴牧藩領1村、高岡藩領1村、安房上総知県事領44村、内訳は旧幕府領1村、旗本領44村)

長柄郡のうち - 45村(旧幕府領2村、旗本領6村、与力給地1村、鶴牧藩領1村、安房上総知県事領40村、内訳は旧幕府領2村、旗本領39村、与力給地1村、一宮藩領2村、生実藩領1村、吉井藩領1村)

山辺郡のうち - 8村

なお、いずれも相給が存在するため、村数の合計は一致しない。

播磨の国二郡(六千八百石)

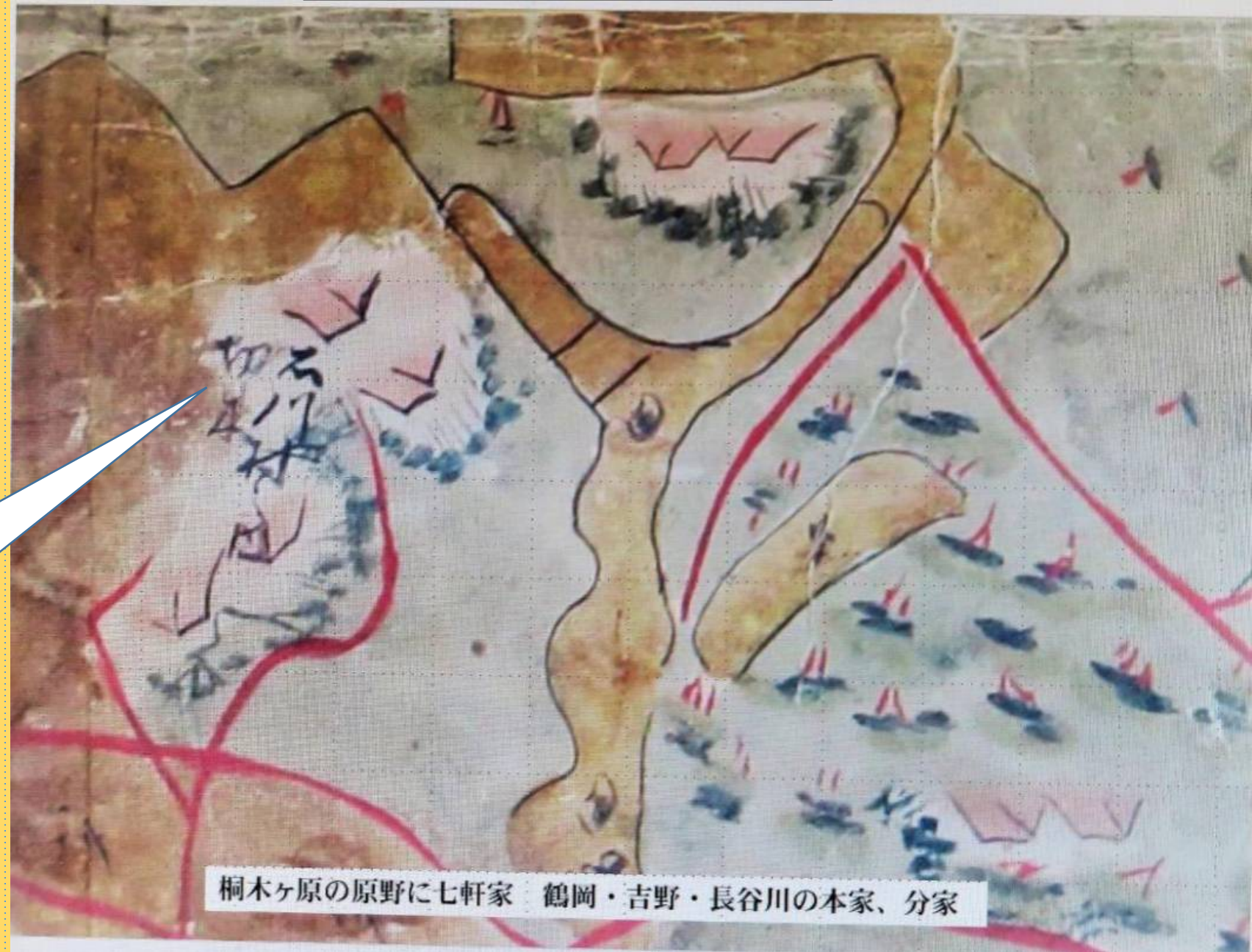
柴山文平:元久留米藩士、上総・安房支配



2. 桐木原台地の開墾

2-①. 切木の七軒屋絵図

石川村
切木



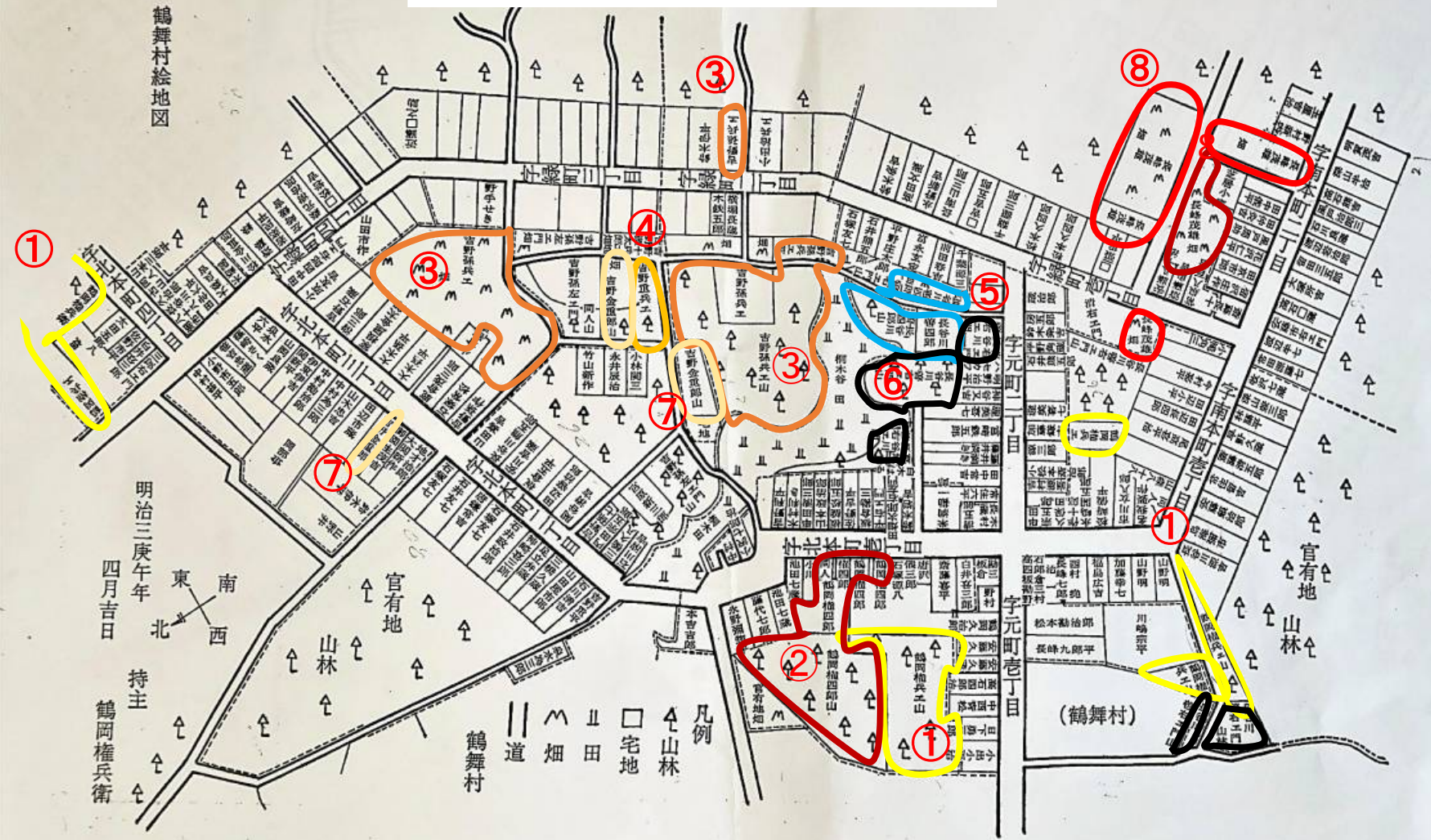
桐木ヶ原の原野に七軒家 鶴岡・吉野・長谷川の本家、分家

2-②.切木の七軒屋

- ① 鶴岡権兵衛
- ② 鶴岡権四郎
- ③ 吉野孫兵衛 (名主)
- ④ 吉野重兵衛
- ⑤ 長谷川善四郎
- ⑥ 長谷川善兵衛 (長谷川善右衛門)
- ⑦ 吉野金重郎
- ⑧ 長峰茂雄

⑦の吉野金重郎は住んでいなかった。山地となっている (鶴舞史話より)

明治3年4月当時の町人住宅



鶴舞村町人住宅居住図 (鶴舞, 鶴岡家蔵) (明治3年4月現在)

戸数約208戸

2-③.開墾と整地、字、町名命名

1.藩庁、藩士邸宅:数百戸

- ・総面積:三十五万坪(1,155,000㎡)、藩士卒に割当、自費で開墾整地、家屋は官費でまかかった。
- ・庁内 郭内広小路、広小路、一番小路、二番小路南北、三番小路南北、四番小路南北、五番小路、馬場先、蔵前、黒石、表谷中、裏谷中、卍小路、池崎、常住等の字がつけられた。
- ・庁の西 庁の西南池和田村畑地松林を子来(ねごろ)、若松町、杉沢台と駒形台を東富岡、古宿畑地を翠丘とし、五間林を西富岡へ、百石林・抗木林を神林へ、富士台はそのまま、大六天・江子田林を室戸、雪解沢へ黄金台は其のまま、高砂一丁目、二丁目、三丁目等
(読み解くと、広小路までが武家屋敷、卒は黄金台等遠くに住居)

2.市街地 商工者:数百戸

- ・総面積: 畑地林地約4万坪(132,000㎡)を市街地に当てた。
- ・庁より東(広小路より東) 市街地: 元町一丁目、二丁目、南本町一丁目、二丁目、相生坂、北本町一丁目、亀井橋、北本町二丁目、三丁目、四丁目、同南横町、同横町、緑町一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、日吉町、同横町と町名が命名され鶴舞町を形成した。、

3.道路の整備

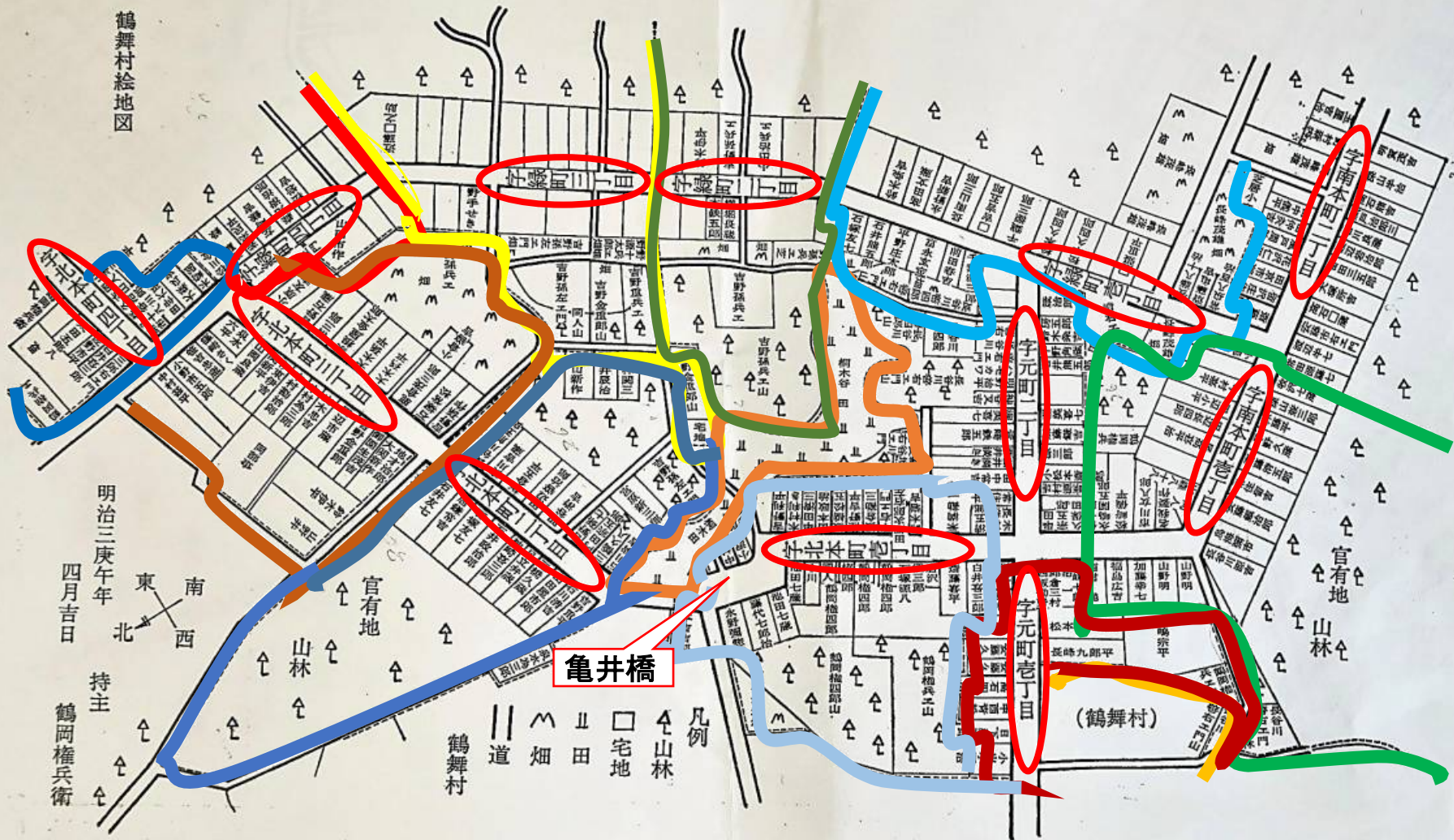
- ・長作通り: 北西隣村真ヶ谷村より川在(かわざい)村への近道補修 菊間藩を通り東京への道を造った。
- ・相生坂: 東南の隣村田尾(たび)へ新道を開き、大多喜を経て安房の国へ通じる道を造った。
- ・新坂: 東の長南宿へ通じる隣村奥野村への新道を造った。奥野、深沢村を通り長南へ通じる。

4.移転 明治3年4月より年末、士卒、商工業者移転

移転費用: 士卒:朝廷より下賜、不足は歳費、商工業者:自費

2-④.町名と町人居住図

交易発展の為、市を開いた
 一日：元町より南北本町通りの亀井橋まで
 六日：北本町2丁目より三丁目



鶴舞村町人住宅居住図（鶴舞，鶴岡家蔵）（明治3年4月現在）

3. 鶴舞陣屋

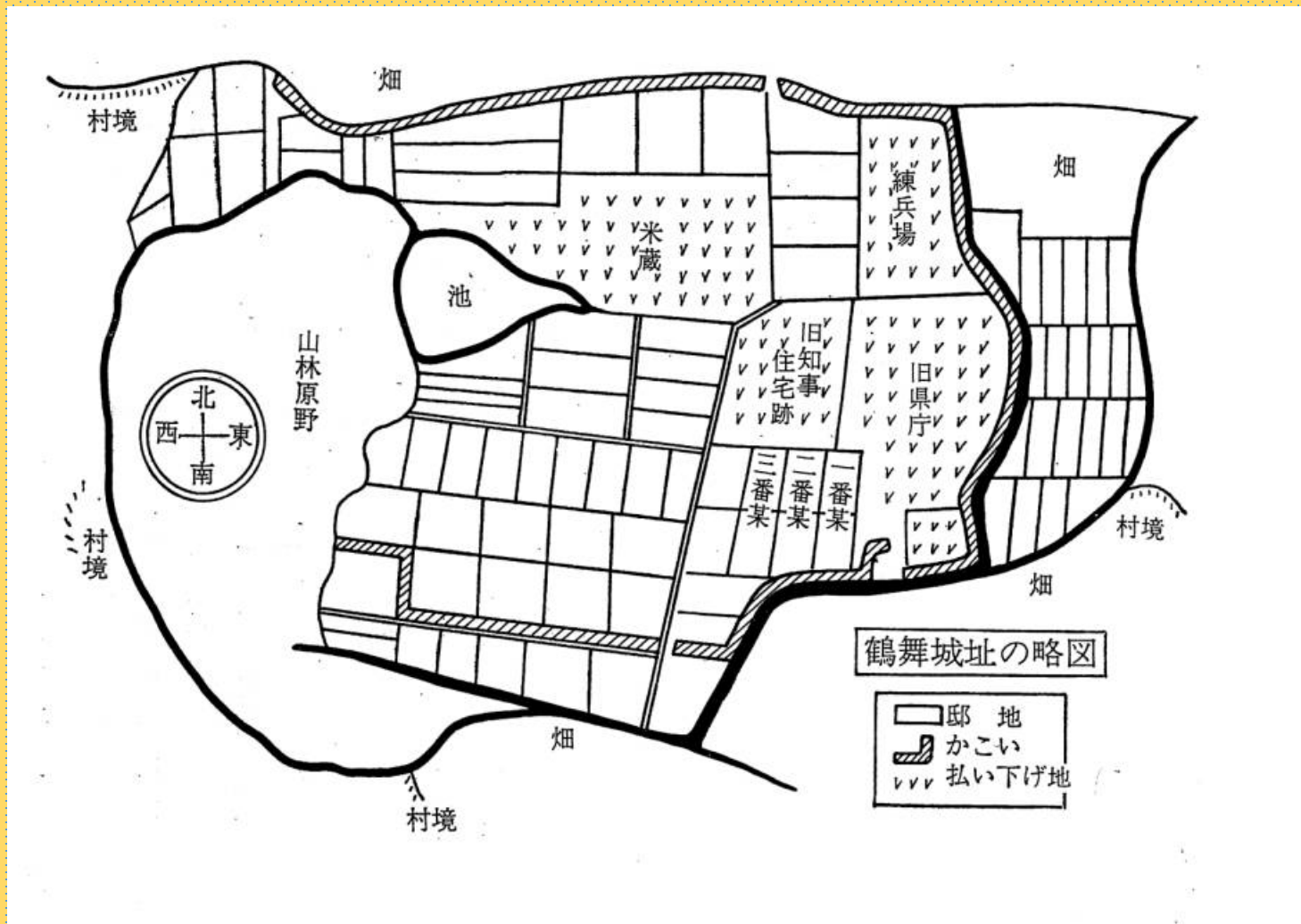
3-①. 鶴舞陣屋跡と旧知事邸宅跡(鶴舞小学校:明治6年8月15日開校)

小学校に使用された井上正直知事の邸宅

鶴小百年のあゆみより

部屋々の畳を外し、粗削りの床板で、教室の小窓の腰板には襖紙が張ってあり、室々の区切りには厚い板戸のはめこみ、教室は北から数えて南へ六室程、南の端に教師の宿直室があり、その北隣りが公僕の部屋、その縁側はひどく床が高かった。二間ばかりの板の間に手桶が二つ程ひしゃくがついていて、南の裏の通用口近くにはつるべの井戸があり、**東の正面から入ると広い庭**、雨の時水たまりになり泥んこになった。庭中に椎の木が一本、南境に松が一本、北に梅と桜の古木とつげの木が広がっていた。……**正面からいって運動場を真つすぐ行ったところに大玄関**があった。

玄関前には石畳があり、ケヤキの一枚板を並べた玄関……分厚い一枚板の一段を上ったところに重い大戸が四枚あって子供には動かない。大戸から中は十畳程の広間……この校舎は明治四十三年新校舎落成迄使われた。



3-②.陣屋周辺

旧鶴舞小学校・庁舎周辺図(明治15年6月迅速測図)

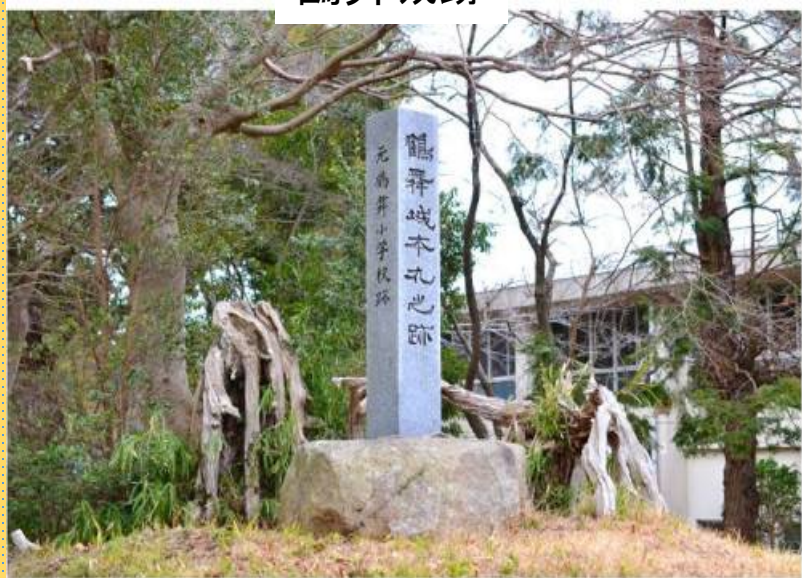
明治一五年頃

- ・ため池は、二つあり現在のようないくつかの姿ではなかったと思われる。(6月の田植えシーズンで水がない?)
- ・道路はため池の南側を通り、新しく道が出来たと思われる。
- ・井上邸は小学校に明治四十四年迄使われており、配置は右の通りと思われる



3-③.城下町のなごり

鶴舞城跡



井上正直侯



鶴舞神社



城内井戸



井上邸跡



堀に利用された溜池



3-④.伏谷如水の墓
(岩井戸 吹上坂下)



娘

妻

伏谷如水

3-⑤.龍溪寺

石川倉次の父母が眠る曹洞宗のお寺。

この寺は室町時代に池和田城主多賀氏の命により創建された木像釈尊如来坐像は市の文化財に指定されている。
浜松から転封してきた土族も多く眠っている。
館林・浜松等の地でなくなれば龍溪寺へ埋葬された方もいる



3-⑥.浜松への思い

完成していれば浜松城に似ている

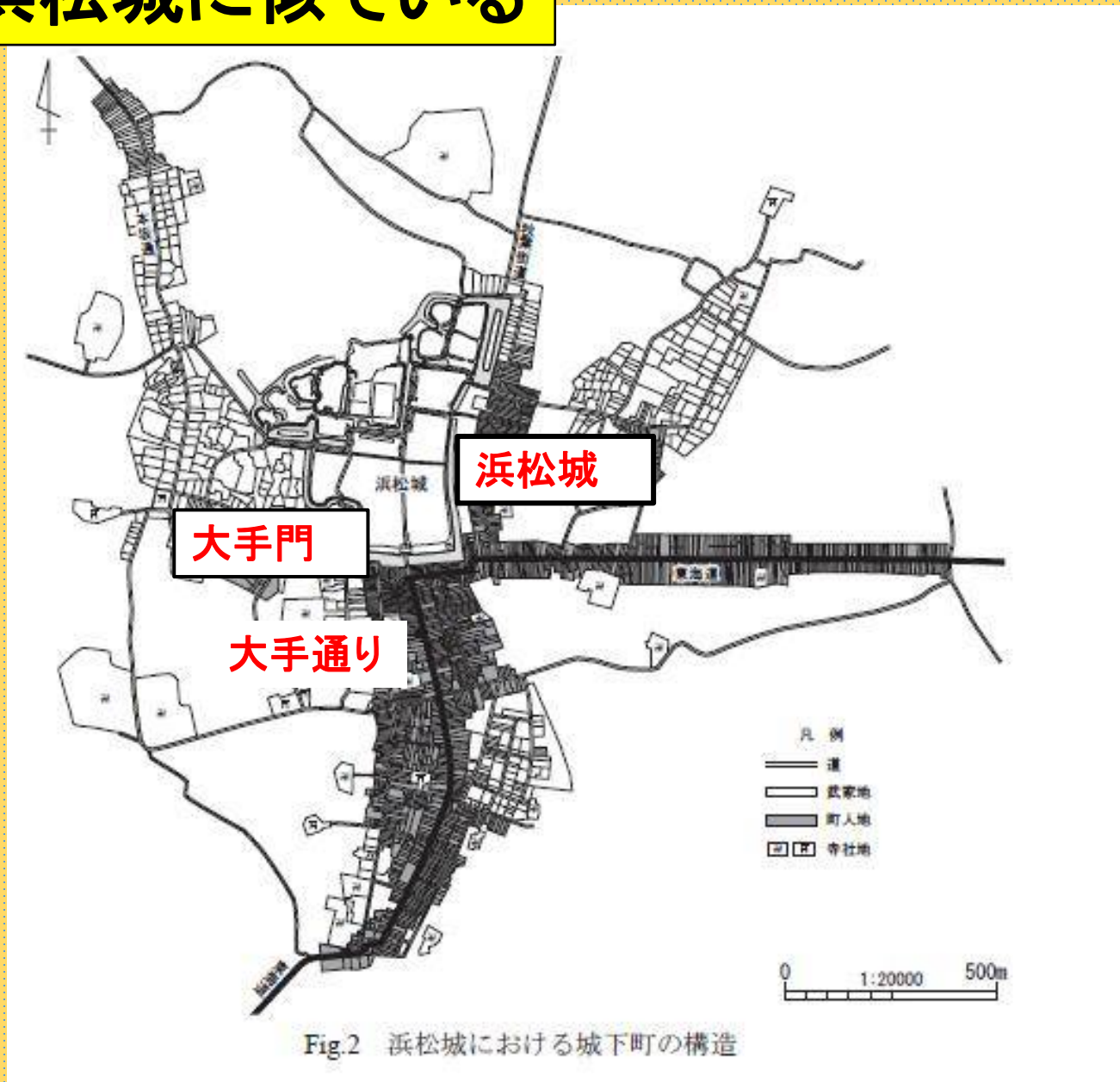


Fig.2 浜松城における城下町の構造

3-⑦.浜松城



鶴舞の井戸とよく似ている

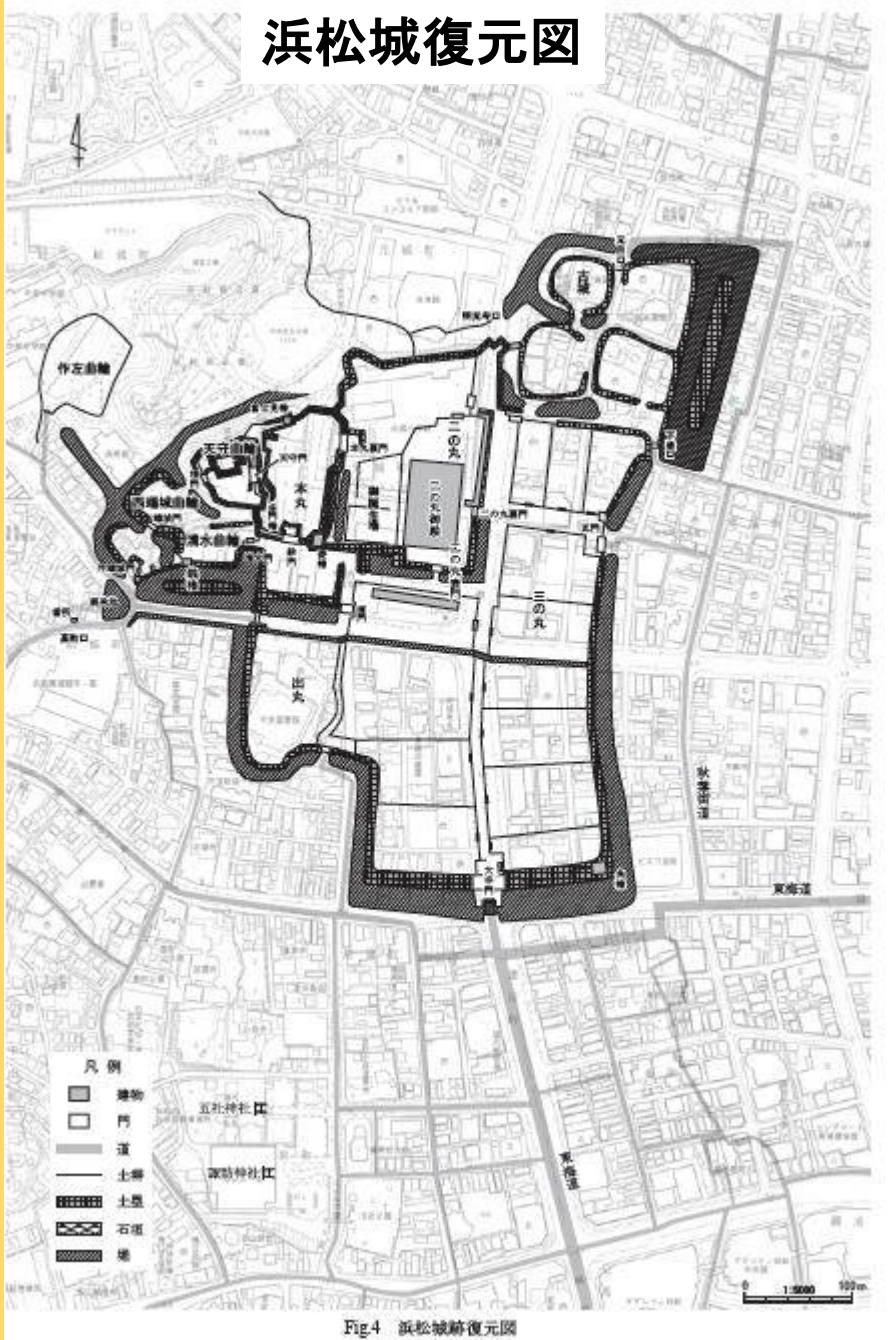


Fig.4 浜松城跡復元図

4. 鶴舞藩体制

4-① 藩官職一覽

一、序掌以上	一、等外史
参事 一 (二〇五石)	牧民片付属 六 (六石)
大参事 一 (二〇〇石)	會計方付属 三 (六石)
権大参事 二 (六五石)	監察方付属 三 (六石)
少参事 三 (四二石三斗)	軍事方付属 一 (六石・五石)
大属 三 (三石五斗)	東京詰大属付属 二 (六石)
権大属 八 (二十五石)	捕亡掛付属 五 (六石)
少属 六 (十六石)	營繕方付属 三 (六石・五石)
権少属 一〇 (二三石)	徒刑場掛 二 (三石五斗)
史生 五 (二〇石)	給事 十八 (三石五斗)
序掌 三 (二〇石)	生産方付属 八 (三〇両・二〇両)
	徒刑場上番 六 (十二両)
	厩飼方下掛 (九両)
	時太鼓掛 六 (九両)
	因獄下掛 六 (九両)

一、武官	大尉 一 (三三石五斗)
中尉 二 (二五石)	少尉 三 (一六石五斗)
権曹長 三 (二三石)	軍曹 十八 (一〇石)
常備兵伍長心得 二〇 (六石)	常備兵 九二 (五石)
予備兵 二二五 (三石五斗)	喇叭手伍長 一 (七石五斗)
喇叭手 九 (五石)	武技教授 二 (七石五斗)
武技準教授 六 (五石)	文武教員 一 (二〇石・一二〇両)
小学大訓導 六 (七石五斗)	小学訓導 六 (六石)
小学訓導補 六 (六石)	

在京中 (二〇四円)

習書師	習書師補	数学取立	学校寄宿寮取締	医師	種痘所掛	種痘所付属	貢進生	官録
七 (七石五斗・六石・三石五斗)	四 (五石)	一 (二五両)	三 (二二両)	一 (二二〇両)	一 (二五両)	三 (二二両)	一 (二二〇両)	米 三四九三石五斗
								金 一三二六両
勅任官 一	秦任官 三	判任官 三八	使部以下付属 一一五	判任武官 二七	兵隊 三三七	文武教員 三五	計 五五六人	

4-②.フランス式兵制改革

明治四年四月、フランス式に兵制改革を実施

大尉一名、中尉二名、少尉三名、権曹長三名、軍曹十八名、
常備兵伍長心得二十名、常備兵九十二名、予備兵二百十五名、
喇叭手伍長一名、喇叭手九名（武官二十七人、兵隊三三七人）

フランス式音楽隊の編成

横浜に藩士を派遣して習得させ鶴舞藩楽隊を編成、藩兵の
演習の際や小学校（明治6年）の三大節の式日や村の祭礼
などでも演奏された。

鶴舞転封以前の浜松藩時代、既に「繫鼓方」が置かれていた

明治二年十月の鶴舞藩兵人員調

振武隊：司令官四人 伍長十三人 隊員百六十九人
壯進隊：司令官六人 伍長十六人 隊員二百二十四人
先進隊：司令官八人 伍長十三人 隊員二百二十二人
大砲隊：司令官四人 伍長四人 隊員三十人
右隊付属の役：三十二人

総計七百三十九人 内 兵士 二百七人

兵卒 五百三十二人



歩兵 十四小隊（小隊は四十人）
砲兵 二分隊
大砲 四門（弾薬は四百五十発）
小銃 四百六十丁（弾薬八万一千二百発）

5.藩校克明館

・克明館の克明の2字は荀子正倫編「書曰克明明徳」、克(よ)く明徳を明かにするという語から選んだもの。

克明館の特色は、士農工商誰でも入学できる道が開かれている。

・明治3年4月 浜松藩の克明館を転封後も踏襲（教育に力を入れた。）

・校地面積：1405坪(4636㎡) 校舎建坪：552坪(1821㎡) 現在の鶴舞公民館の地

・鶴舞の克明館については詳細は不明だが規則書が残されている。

*①寄宿生定員100人迄、月に白米一斗五升と金2分を納める。 ②通学生は定員無し、

③生徒は十日以上欠席で除名、 ④怠惰過失ある者は直に退学、

⑤校則に背き破廉恥の言行不一致の者は放校

*規則書の校体 学校は人材を育成する場。洋学によって各国の政教風俗の異同を知り経国の活眼を開く。

春秋2回の試験の結果優秀な伎備を持ち言行の正しい者は、役人としての道が開かれていた。

・設備； 教室、講堂、斉堂、寮、蔵書館、剣槍弓銃の練式場(浜松藩の踏襲で同様なものが出来たと思われる)

・生徒の概数(最盛期)： 寄宿生66人、通学生638人、合計：704人

・職員 学頭には国学者村尾元融の養子元矩が任じられ、石川倉次(日本点字の考案者)、

賀古鶴所(森鷗外の親友。我が国耳鼻咽喉科学の創始者)などを輩出した。

職員数 当初： 学問所幹事1人、教官1人、助教9人 合計11人

学制改革後(明治3年)： 支那学2人、洋学4人、算術3人、手跡3人 合計13人

其の後： 小学大訓導1人、小学訓導6人、小学訓導補6人、

習書師1人、習書師補2人、数学取立3人、小学寄宿寮取締4人 合計23人

其の後増員 合計35人

6.鶴舞神社(秋葉神社)

6-①.鶴舞神社(秋葉神社)誕生

明治3年2月創立 先祖代々稲倉魂命(いなくらたまのみこと)を祭る稻荷大明神を浜松藩より移す、明治27年(遠州秋葉山秋葉山本宮秋葉神社と越後栃尾秋葉山の秋葉三尺坊大権現の二大靈山を起源とする(火防守護)秋葉大神を合祀



6-②.南総市原郡鶴舞領主君神名録

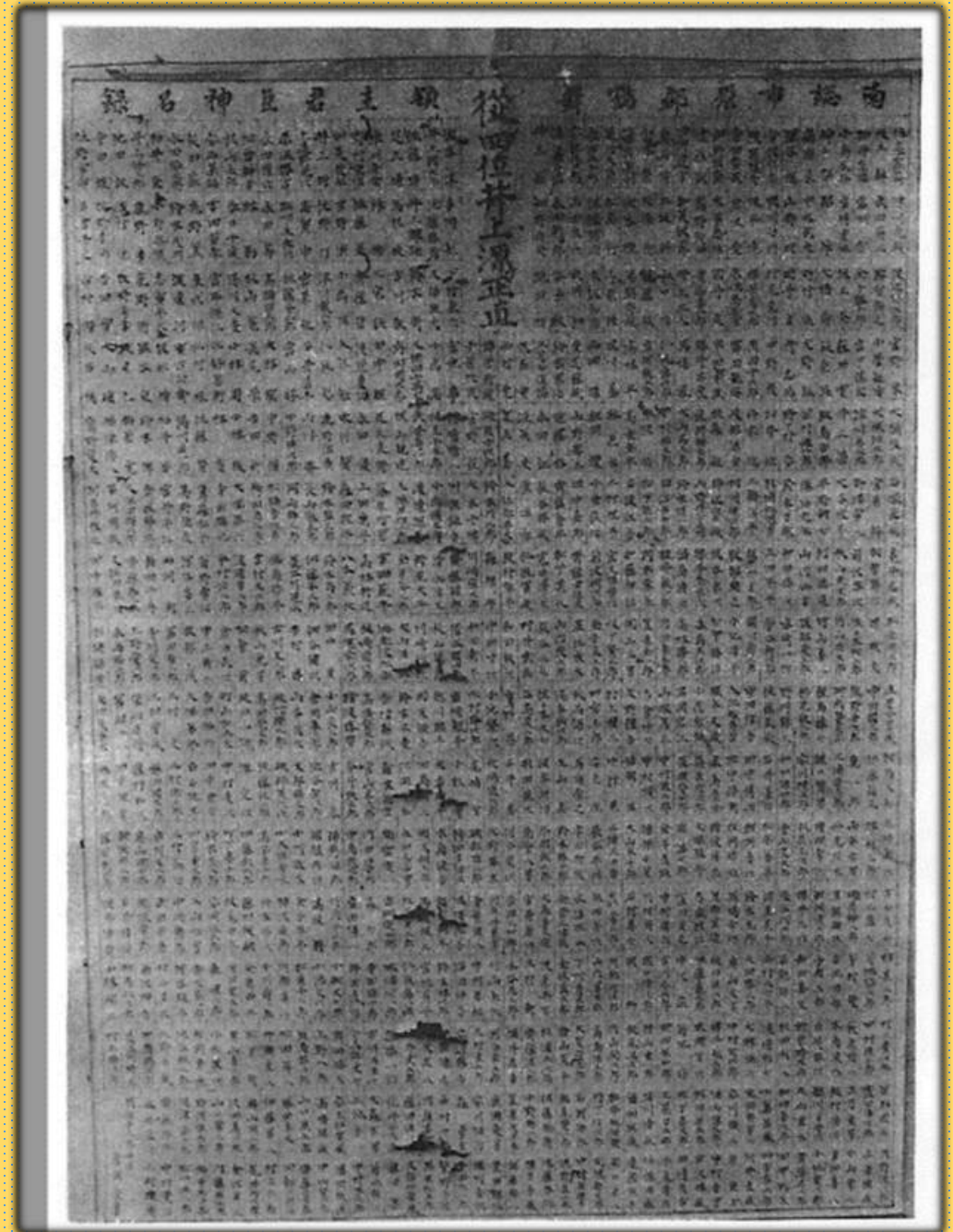
「南総市原郡鶴舞領主君神名録」

神社内に所蔵され、士族720名連名の掛け軸を前に、毎年元旦毎に新年を祝い懐古懇親をおこなったことが伝えられている。

掛け軸の中央に従四位井上源正直そして16段にわたり人名が記されている。掛け軸は全長170cm、幅97.8cm 筆者は倉垣愛、明治13年記

この集まりは太平洋戦争の勃発により取りやめられた。

神名録は戦後行方不明で亡失したものと思われていたが神社の隅から発見された。



7. 鶴舞藩の偉業「続日本紀考証」の刊行

「続日本紀」とは：

平安初期の歴史書。六国史(りっこくし)の第二。40巻。菅原真道(すがわらまみち)・藤原継縄(ふじわらのつぐただ)等の編。延暦16年(797)成立。文武天皇即位の文武元年(697)から垣武天皇の延暦10年(791)までを、漢文の編年体で記述。

- ・(六国史:奈良・平安時代に編纂(へんさん)された六つの官撰の歴史書。日本書紀触位・続日本紀・日本後紀(にほんこき)・続日本後紀・文徳実録・三代実録。いずれも編年体による記述。)
- ・(編年体:歴史記述の形式の一。年月の順を追って事実の発生・発展を記述するもの)

「続日本紀考証」全12巻

著者:村尾元融 刊行は養子元矩、元融の孫元長が鶴舞へ移って刊行に奔走、藩主の出資を得て公刊された。移封により非常に苦しい財政難の中での刊行は称賛されるべき。(元融は嘉永五年四月三十日没四十八歳)

藩主の序文

舎人親王の日本書紀に続きて貴み重くみすべきは、続日本紀になもありける。其の日本書記は、今昔の博識など、何くれと考へ正して詳しく説くさえに、甚だ多かるを、此の御史は、しも世に伝える刊本は、文字のぬけたる、誤れるありて、読み難きなるを補い正したる。書院になきは、甚だあかざる事ならざらんや、村尾元融此の事をうれい、痛み、なげきて、古き写本共にくらべ合わせ、脱けたるを補い、誤れるを正し、読み書き難き段々、いわれある條々には、証となすべき書等を列べて考へをさえそそぎしも多かる。いたく勤めたりと云べし。かくの如くして、一卷二巻と次々摺本にすべく、思い立ぬる程に、汝物故たるは、いともいとも憾めしく愛おしきことなりかし、益あるを、その子元矩、父のろろ志を継ぎて、次々、この草稿共を丁寧考へ正して遂に事、おわんぬる。労は少なからず。いかで此れを世に広くめぐらすこそして、此の御史、読みましなする者の階梯ともなさばやと、此度、かくの如く、板にほらせて吾が文庫におさめ並べ置くなむ。口怜本津御史と共に此の書の永く久しく世に伝わらば、元融の功績も千歳の後の残らざらめやと思ふまにまに書き記して、これの序とする。

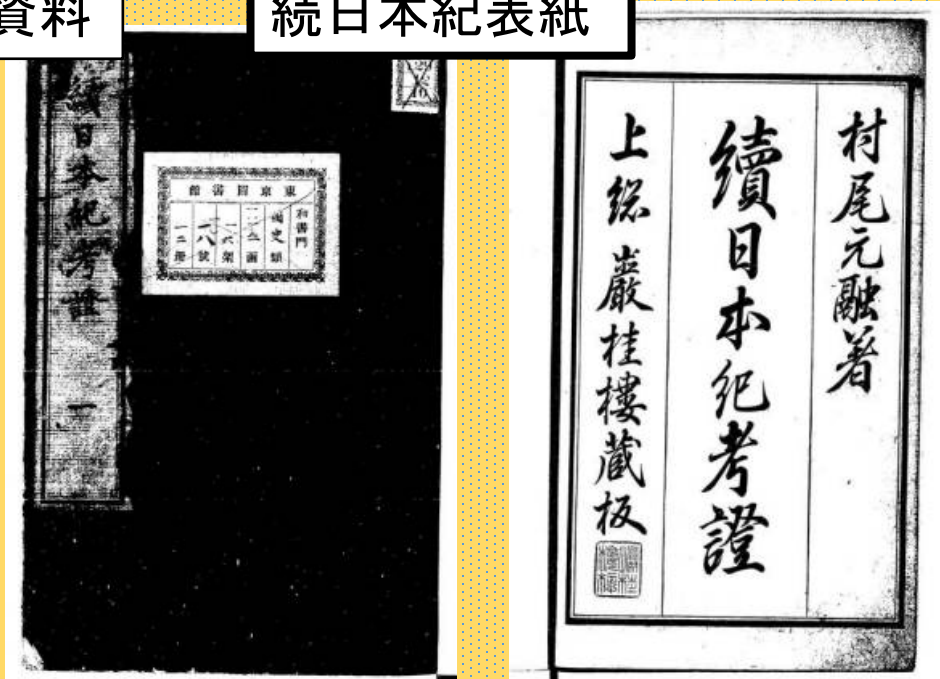
明治三年二月

鶴舞藩知事従四位源朝臣正直

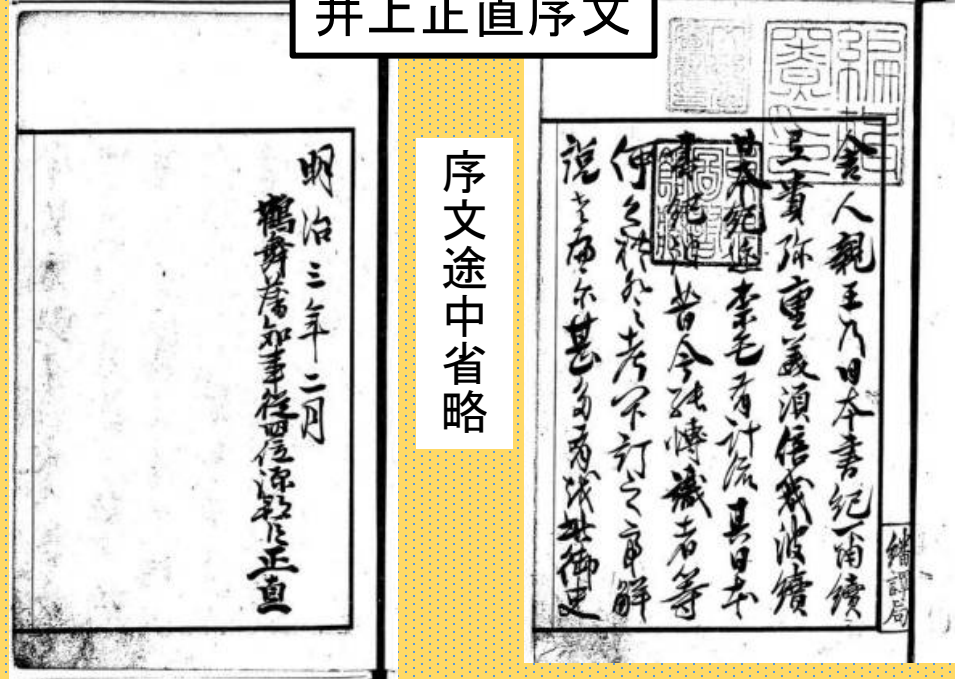
(朝臣:あそん 人臣の最高位を現す姓)

7-①. 續日本紀考証資料

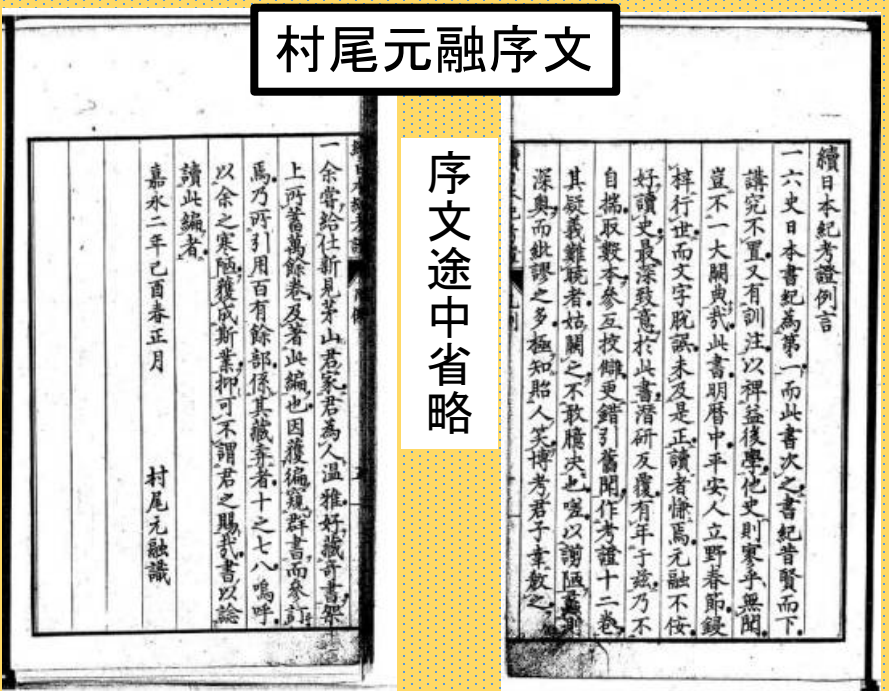
續日本紀表紙



井上正直序文



村尾元融序文



第一卷本文1ページ



8.鶴舞藩の女性を中心にした伝統文化

8-① 女性の殖産興業

当時の鶴舞には7軒の家しかなく、そこに浜松藩士以下家族約3000人が浜松より移り住んだ。その後、井上正直公は、廃藩置県により明治4年東京に移る迄の2年10ヶ月(大名として9ヶ月、知事として2年1ヶ月)意欲的に領内の統治にあたり産業の開発、振興に力を注いだ。

男性は、農民と共に土地の開発にあたり、道路を作ったりトンネルを掘ったり、井戸掘りをした。鶴舞地域(鶴舞カントリー地区)は水質が良かったが、切木の地は耕地の位置が高く深い谷で水の便が悪く至る所に井戸掘りをした。母親は子供が外に遊びに行く時は井戸の穴に落ちない様注意をした。現在は雨風により分からなくなっているが、注意書きした看板が立てられている所もある。

一方、女性は殖産興業に重点をおいた、浜松藩で発展した軽工業の再現を計ったのである。

- ①浜松から進んだ技術を持ち込んで綿織物を作った。内職をして発展、後に市原郡立市原染織補習学校ができた。その後、市原高等女学校になり今の県立鶴舞桜が丘高等学校となった。(2019年3月で市原高等学校と合併)
- ②村々の一部の山中には桑の木が若干あったので、養蚕を奨励したが失敗に終わった。
- ③養豚を勧め、種豚を預けて仔豚が生まれたらその半数をあたえられた。
- ④菜種・綿の実から油を搾り、動物の油と共にローソクの原料としたり、艶出し、蛇の目傘表面塗りにした。
- ⑤紙の原料のこうぞう・みつまたを植え、樹皮から和紙を作った。
- ⑥みかん・もも・柿の植樹、その他お茶、しいたけ・サツマイモを作った。さつまいもの苗を自転車にて売りにくるのでそれを皆で種し木して増やし植えた。

8-② 人民教諭書

人民教諭書とは、道徳的なことが書かれ、婦人・子供まで納徳の出来るように読み聞かせていた(教育熱心)

- ①質素・儉約……………危機に備え3年間位の蓄え。お茶は出しても茶菓子は出さない。御飯を炊く時、葉大根を入れると倍になる
- ②風紀を正す……………父母を大切に、争うことがない様争いごとはやめる。仲良く
- ③産業の開発振興…家業に精を出す
- ④貧民の救済……………子の間引きは鳥獣にも劣る行為、実際にはあまり守られていなかった。貧乏の為、捨子もあつた
- ⑤褒賞を多くする……褒めて与える。賞を受けると次の活躍のエネルギーとなる。内職に励む人、子育て上手、儉約家、誠実な人、捨子を育てた人、姑に仕えた人、勉学に励む人等が対象。名主には扇子・盃、88歳以上の者には扇子と菓子料が送られた。浜松からの国替時、宿所となった家へ御礼として小判2枚授けた。

これらのほとんどが浜松からの教育文化(考え方、生き方、産業)女子は武家の所作を基本とした。遊びは、まりつき、お手玉であつた。

8-③ 特別な料理

冷やしうどん・のっぺ汁・小麦まんじゅう・おこわ(ちやのこ)・うりの漬物。

さんしょう餅……………3月3日のお節句に供える為、士族が作り分け与えた。浜松はウナギの名所なので思い付きで作られた。

2年10ヶ月は余りにも短すぎた。

廃藩となって殆どが計画倒れで終わったが、何時の世も内助の功は計り知れない！

9.鶴舞城下町の変遷

9-①.鶴舞藩出身の旧士族 (鶴舞付近在住)昭和57年頃

加美家○
湯川家○
伊藤家○
袴田家
増井家
永島家○
角田家○
岡部家○
菊野家

河合家
越川家
木島家○
杉田家○
青葉家(茂原)
松本家(茂原)
武田家(田尾)
稲葉家○
小野家○

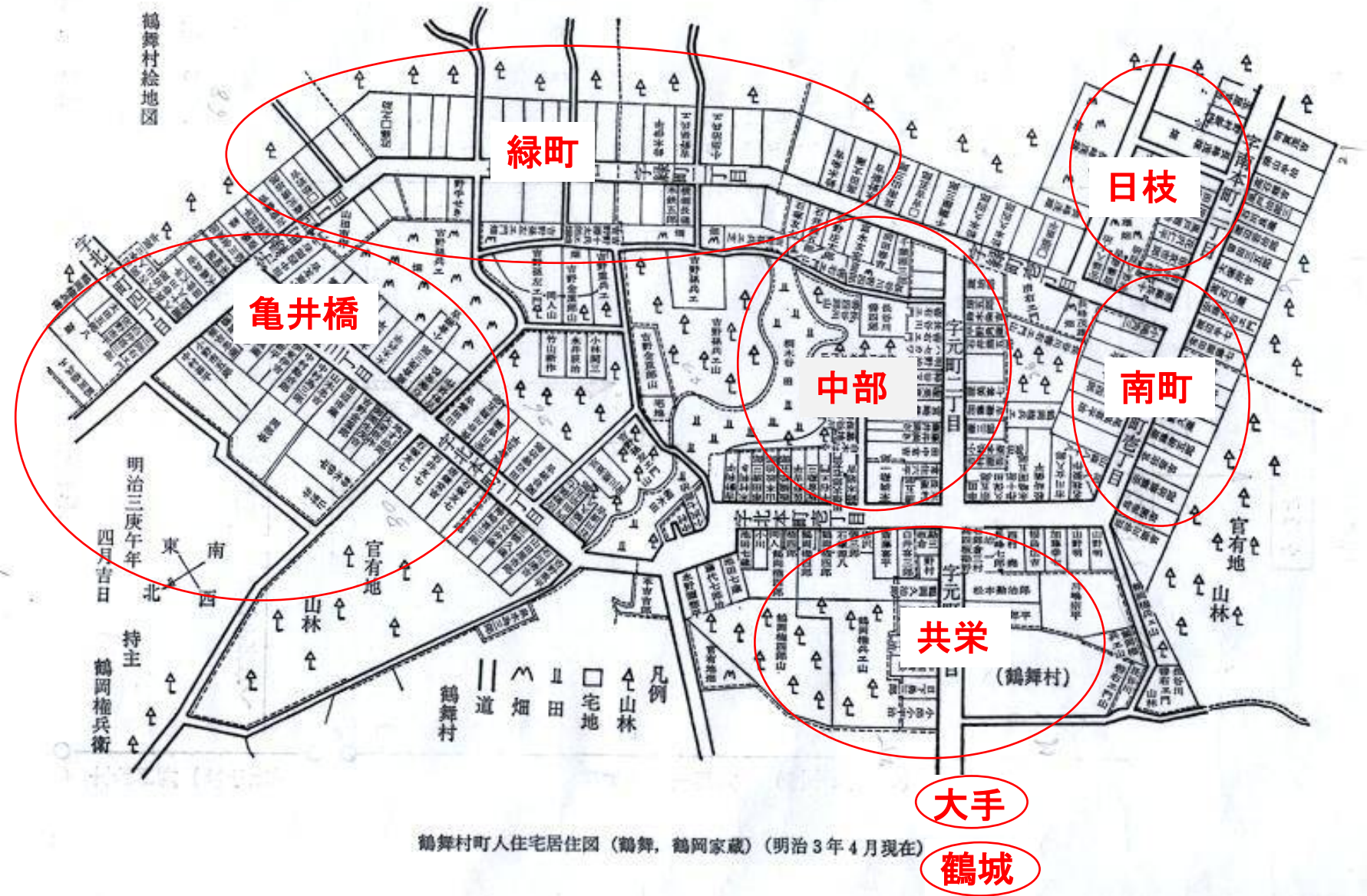
佐藤家○
斉藤家○
犬塚家
久保田家○
西ノ宮家
山内家○
星沢家
中村家

高嶋家○
沼田家
伏谷家○
斉藤家(牛久)
倉垣家(岩崎)
金子家(真理)
川崎家

○:確認済

9-②.部落名(町内会)の謂

- ①鶴城(藩邸があった)
世界大戦中隣組が出来た時
- ②大手(大手門があった)
戦前よりあった
- ③共栄(共栄館(公会堂))
商店街が共に栄えるように
- ④南町(藩の成立と同)
正式には南本町
- ⑤日枝(①③と同時期)
日枝神社より命名
- ⑥亀井橋(戦前よりあった)
石橋があったので鶴舞の鶴と亀のめでたい言葉で付けた
- ⑦中部(①③⑤と同時期)
台上の中央部に当たる所から付けた



鶴舞村町人住宅居住図(鶴舞, 鶴岡家蔵)(明治3年4月現在)

9-②.現在の町内会



9-④.漸減した鶴舞城下町の人口

1.千葉県史より

・明治3年（鶴舞藩）	戸数	13,417戸	人員	63,907人
内訳	華族	1戸	4人	
	士族	440戸	1,201人	
	卒	258戸	1,984人	
	平民	11,338戸	59,704人	
	社務人		206人	
	僧		350人	
	穢多		145人	
	非人		218人	

2.廃藩置県後（鶴舞村）

- ・最盛期 鶴舞城下町 武士：約700戸 町人：約300戸 合計約1000戸
- ・明治7年 627戸 人口3126人 千葉県内で8位（千葉町：721戸、3110人）
- ・明治13年 368戸、人口1572人 千葉県内で21位（千葉町：1031戸、5817人）
(以上千葉県統計表による)
- ・明治19年 271戸 人口1275人

3.現在（市原市人口統計）

- ・平成14年（1月） 605戸 人口1522人 （2.52人／戸）
- ・平成31年（1月） 497戸 人口1075人 （2.16人／戸）

一番は切木原を開墾し13ヶ月で城下町を作ったこと！

1.敷教小助

村々の中から人格・見識のすぐれた名主を任命、禁止令等が隅々まで行き届くようにした。

2.通達指示

- ・村々へ出張時の役人に、茶・菓子酒肴等一切出しはいけないと村長へ通達
- ・分限不相応の祝事振舞等の禁止を村長から懇切に申し諭すように通達
- ・衣食住の調度に奢侈を禁じ、節儉を旨とし分限を越えぬよう、家造りは、名主に申出分限相応の普請をするよう。
- ・「賭博厳禁」を徹底させるよう、敷教小助や名主に通達
- ・「救貧育子策案」を領内配布
- ・「墮胎厳禁と、神職僧侶は貧民を救うことに協力するよう」知事の考えを伝えた。
- ・太政官に類する次の名は改めるよう通達
(左兵衛,右兵衛,左衛門,右衛門,允,亮,佐,介,佑,輔,守,大夫,左馬,右馬,司 等)
- ・村役人へ沙汰無しに小前(小百姓)が集合することは禁制、
(農事を妨げ、賭博に入費ひいては村が貧しくなる)
- ・頼母子講等は賭博の類で制禁であり村長から厳禁させるよう通達
- ・藩内の潰れ家を相続再興したものには褒賞を与える通達
- ・社寺境内持山山林竹林の伐採を制限

3.窮民救助

- ・明治2年12月、生活困窮者調査、199村、3809人 に対し米725俵与える。
- ・飢饉続きの中、明治三年三月、金2000両を与え、南京米を買い入れ貸渡した。

4.種痘所を開き藩士、一般人にも種痘を実施。小児を村役人宅に集め医師が巡回して実施。

5.産業振興 重点課題であった

- ・生産局を設け、勧工を担当させ、内職として傘作りをするものを募っている。
- ・養豚、養蚕（これは失敗）浜松藩で発展した軽工業の再現を夢見た。

養蚕：山林中に若干の天然の桑があった。

- ・交易の発展のため、一と六の日に定期市を開いた。

道路の整備 *奥野・深沢村の山道にトンネル掘り、長南駅との交通が非常に便利になった。

*西隣村真ヶ谷村より川在村に通ずる近道を補修し、長作通りと名付けた。

菊間藩經由東京へ

*東南の隣村田尾村へ新道を作り相生坂と名付け、大多喜經由安房の国へ

- ・庁の東西側の山林畑地に地名を付け、開墾した。
- ・管内の不毛の地を開墾計画 藪地,谷地,荒地,野地,川曲地川,竹林等を開墾していたが、廃藩となってほとんどが計画倒れとなった。千葉県になって一部実施されたところもある。

6.表彰

- ・多種多様な方面から表彰を受けている。

忠孝節婦篤農家、文字をたしなむ者、家を再興した者、貧困者の救助に尽力した者、村役人の精励者、寄進者に対し、米や金を与えている。約122人

- ・村々の名主に扇子と盃、八十八以上の老人に扇子と金、村の戸毎に扇子を与えてる。

(領民1人々に至る迄、親しみを深め苦楽を共にの趣旨で、河内守の立派な心配り。)

7.キリスト教

キリスト教は幕府の禁制がそのまま明治政府に引き続き禁令として厳守された。

明治六年二月十九日撤廃。鶴舞藩でも支配管内に切支丹は存在しない旨を認め、藩知事の捺印花押した証文を政府弁官に出している。

10. 鶴舞藩出身の人物

10-①. 井上正直 (井上河内守正直) (1837年(天保8年)～1904年(明治37年))

天保8年(1837年) 10月29日 館林藩主・井上正春の子として生誕。

弘化4年(1847年) 正春死去、同年4月22日、藩主を襲封。浜松6万石の城主

嘉永4年(1851年) 従五位下・河内守に叙任。これより慶応3年(1867年)迄、奏者番、寺社奉行、を経て老中を都合2期務め、文久2年(1862年)には従四位下に昇叙、河内守如元、侍従に遷任、外国御用取扱、外国との交渉等江戸にて要職を歴任した。

明治元年(1868年) 鳥羽伏見戦争後、尾張藩主徳川慶勝は周辺の国々に朝廷への恭順を勧めた。浜松藩も井上正直は、老中として江戸にいたが、東征軍大総督が桑名に到着時、浜松の城代家老たちの協議により朝廷への恭順書(勤王誓書)を提出した。東征軍の迎えは、家老の伏谷淳であった。9月には、徳川宗家の駿河・遠江への封じにより、上総鶴舞に転封が命じられた。

明治2年(1869年) 正直は1月27日、上総へ向け出発、約14日間で市原郡潤井戸に到着、上総国埴生郡長南町矢貫村へ赴き、仮本営は今関勘四郎宅、仮庁舎は三途台の長福寿寺→浄徳寺、版籍奉還し鶴舞藩知事任命、市原郡内田郷石川村地内桐木原への仮陣屋作りの許可を受け開墾着手。

明治3年(1870年) 陣屋の完成を待って矢貫村の藩庁を鶴舞桐木台に移して居住(約7百戸)、以後、明治4年7月の鶴舞県施行まで勤める。

幕末期の激動の中を、譜代大名として幕府の中心的役割を果たした後、新政府に恭順、ついには上総転封となり、城郭も、陣屋もない、原野同然の地で開墾、わずか“2年10ヶ月”という短期間であったが、浜松藩主、鶴舞藩主、鶴舞藩知事として、世の中の混乱期に尽力した。明治4年8月、朝命により家族共に東京に移住、子爵を授けられ、明治37年(1904年)68歳で死去、墓所は現在の東京駒込の染井霊園にある。



10-②.石川倉次(1959年(安政6年)~1944年(明治19年)(享年86歳)

- 安政6年(1859年) 遠江国浜松城下で生まれる。8、9歳頃藩の克明館で勉学。
- 明治2年(1869年) 藩主、井上正直公が上総の国への転封となり、石川家も鶴舞に移住し鶴舞の藩校(克明館)に学ぶ。
- 明治8年(1875年) 鶴舞小学校を卒業し、千葉師範教員検定に合格。
上埴生郡水沼小学校(長南町)に勤務。
- 明治12年(1879年) 南相馬郡鷺野谷小学校(現、沼南町立手賀西小学校)に勤務。
- 明治13年(1880年) 千葉郡馬加村浜田(現、千葉市立幕張小学校)に勤務。
- 明治19年(1886年) 茂原小学校を退職、小西信八先生に請われ、上京。
官立(国立)楽善会訓盲啞院専務として赴任。点字を翻訳。
- 明治23年(1890年) ルイ・ブライユが考案した6点式点字で日本語を表示することに成功。
これが「点字選定会」で正式に採用された。石川は「懐中点字器」、
「点字タイプライター」も開発し“点字の父”と言われている。
- 明治19年(1944年) 疎開先の群馬県安中市で86歳の生涯を閉じた。



現在、千葉県が生んだ偉人として、県庁に肖像画が展示されている。倉次の両親は、鶴舞「宗洞宗龍溪寺」の墓地に埋葬されている。

石川倉次が発案した点字は、世の人々に明るい灯を与えてくれたと、感謝されている。

10-③.伏谷如水(1818年(天保8年)~1890年(明治22年))

伏谷如水は文政元年(1818年)11月22日藩主井上氏の重職として代々仕えた伏谷家に生まれ(陸奥国棚倉にて)千代又左衛門を襲名、浜松藩家老を務めた。諱は昭良、如水は号である。浜松藩の上総への転封により明治2年藩主井上正直に随行して鶴舞に移住、明治22年6月29日72歳で歿し、池和田岩井戸の墓所に眠る。

明治元年(1868年)浜松藩はいち早く勤王の意思を表明、同年3月22日、大総督有栖川宮熾仁親王により、如水は駿府町差配役に任命された。町奉行解体後の駿府市政を司った如水は次郎長こと山本長五郎を大抜擢し、清水港周辺の警固に当たらせた。次郎長が博徒生活を捨て、世のため人のために尽くす生き方に転じたのは、実にこの時からである。

如水の抜擢登用に応え、次郎長は維新動乱期の清水港周辺の治安を全うしたばかりでなく、その後半生を社会事業家として貫いた。

如水の晩年の史料は非常に乏しい。

明治元年(1868年)駿府町差配役後、浜松城を徳川家へ引渡して江戸へ出府、東京市中取締に任命された。井上氏の転封後、伏谷如水は東京市中取締を勤めた後、帰藩して文事局幹事という役職に付、明治3年に引退。当時の住まいは、上総国市原郡池和田村字岩井戸であった。

その後、明治十一年には東京府下「南豊島郡西大久保村」に居住。明治十六年(1883年)大阪鎮台に赴任中の長男惇が死亡した。如水は再び、市原郡岩井戸に移住し、明治二十二年七十二歳の生涯を終えた。



10-④.小池民治(1959年(安政6年)~1944年(明治19年)(享年86歳)

小池民治は、遠州浜松藩士の家柄で、明治維新に際し上総国鶴舞に移された際、11歳であった。藩校「克明館」出身で「独学にてよく英語を学び、ドイツ語を修めた」という、明治十一年に千葉師範学校を卒業し、教員となり、初等教科書の著述や一の宮家政女学校の創立に尽くした。明治三十三年から大正二年迄県立千葉女子高等学校で教務、明治四十二年から5代目の校長として県教育界で活躍した。昭和11年没、享年79歳。

「真善美」小池民次著(昭和7年、日本学術普及会刊)より

本書「跋」によれば、「恩師小池民次先生は教育に従事されること五十余年の久しきに及び、其の間教育上偉大の功績を遺された。先生は実に千葉県教育界の耆宿であり、又忘れてならぬ大恩人である。学制頒布の当初は既に小学教育に従事され…千葉高等女学校が創設さるるや、同校主席教諭に任ぜられ…東金高等女学校が設置さるるや、其の校長に選ばれ、間もなく千葉高等女学校長に復帰されて大正二年三月職を辞された。其の後長生郡一宮町長加納子爵の招きに応じ同地の私立女学校を経営され、其の校長に挙げられ昭和五年三月まで同地に於て女子教育の為に尽瘁された」とあることから、一宮の女学校長時代に習志野収容所(ドイツ人収容)を見学した折の話である。

10-⑤.賀古鶴所(つるど)(1856年(安政3年)~1931年(昭和6年)(享年77歳)

安政三年(1856年)浜松で、藩医賀古公齋の子として生まれ、明治二年、十三歳で鶴舞に移住、住居は富士台

明治三年(1870年)藩主井上正直の命により江戸に遊学し箕作秋坪の塾に学んだ。

明治十年(1877年)二十一歳時、東京大学医学部の本科生として入学、寄宿舎で森鷗外と同室になり親しく交際が始まった

明治十四年(1881年)二十五歳で卒業、陸軍の給費生であったので、大学出第一期軍医となった。ドイツ留学で耳鼻咽喉科を専攻

明治二十一年(1888年)内務卿山県有朋に随行して渡欧。

明治二十二年(1889年)陸軍医学校で日本最初の耳学科を開講、耳鼻咽喉科の最初の専門医として世間に知られる。

明治三十九年(1906年)山県有朋を中心にした歌会「常磐会」を森鷗外と共に幹事となって、山県有朋が亡くなる大正九年(1920年)まで続けた。当時は、賀古鶴所は赤十字病院で診療に当たっていた。

鶴所は、千葉県の日在海岸に別荘を持っており、鷗外も鶴所の世話で別荘を建築、そこで書いた「妄想」という小説の中で「海岸の松原の中に建てた小さな別荘で過去を述懐する白髪の老人」とあり、鶴所がモデルになったのか、終生の友として交際したのである。昭和六年(1931年)七十七歳で亡くなった。

12.写真から見る鶴舞町

10-①.鶴舞の町(公園からの眺め)昭和初期

大通り
元町1、2丁目



鶴舞公園観世山より市街地遠望

昭和初期の写真で、右に見える通りは公園に通ずる大通り。当時、市原南部の中心地らしいく人家が密集している。鶴舞は上総の軽井沢とも言われ、保養地にも適し、詩人川路柳虹は、ひところ鶴舞町池和田に住居を構えていた。市街地には千葉県裁判所鶴舞出張所、鶴舞警察分署、総武銀行支店などがあり、商業が盛んであったが、市街地以外はおおむね農業を営んでいた。

12-②.鶴舞の町(公園からの眺め)平成

鶴舞公園からの眺めは、昭和初期の街並みと変わらない。家の屋根が瓦やスレートになっている。過去の繁栄がよく分る写真である。



大通り
元町1、丁目

12-③.元町通り

昭和初期の鶴舞元町通り

写真の右手前は総武銀行鶴舞支店。鶴舞にはこの他、小草畑銀行鶴舞派出所があった。総武銀行は千葉銀行に吸収され、現在はこの建物の後に鶴舞郵便局が建っている。城下町として栄えた鶴舞町は、市原郡南部の忠心として発達した。主な旅館には小松本、千登勢、寿があり、いずれも料理店を兼業していた。商人宿には君津屋、中村屋などがあった。大正末期、鶴舞には五台の自動車と二輛の人力車があった。



現在の郵便局

12-④.南町通り

昭和初期の南町通り

此通りは鶴舞公園に通ずる道で鶴舞でも桜並木（花のトンネル）の最も美しい通りと言われていた。鶴舞公園は花見客で賑い、サーカスや芝居小屋が造られた。この桜並木は昭和天皇の御大典記念に植えたもので、現在は存在しない。道路を走る車の一台は、乗合自動車のように、八幡迄運行していたと言われている。



深川芳町の芸妓連 昭和一二年頃
鶴舞公園の花見は、昭和の初めから名高く、東京方面からの
来客も少なくなかった。写真は昭和一二年、鶴舞元町通りを
しやなりしやなりと歩く東京芳町の芸妓連。この人達は花見
時になると、鶴舞芸者応援のため鶴舞に姿をみせた。場所は
高石呉服店、エミ理容店の前あたり。桜並木に一層の艶を添
えている。



12-⑥.平成の鶴舞公園の賑わい

鶴舞公園は千葉県桜名所20選



12-⑦.鶴舞桜が丘から見る房総の山々

鶴舞桜が丘は千葉県眺望100景



12-⑧.小湊鉄道上総鶴舞駅

鶴舞駅は関東の駅100選



13.参考文献資料等

- 1.「鶴舞藩の沿革」(南総郷土研究会双書五巻・六巻) 小幡重康 南総郷土文化研究会 昭和41年
- 2.「市原市史」下巻 市原市 昭和57年
- 3.「千葉県教育史」巻Ⅰ 千葉県教育委員会 昭和11年
- 4.「藩制一覽」日本史籍協会編 昭和4年
- 5.「諸侯年表」東京堂出版 昭和59年
- 6.「旧高旧領取調帳」関東編 近藤出版 昭和44年
- 7.「千葉県史料」近代編・明治初期Ⅰ 千葉県 昭和43年
- 8.鶴舞史談 創刊号
- 9.鶴舞史談 第二号
- 10.「市原市南総地区の遺跡と文化財」市原市歴史と文化財シリーズ第7輯 歴史散歩資料 野口博芳
- 11.千葉県史:明治編 千葉県
- 12.石川倉次物語 永島まつこ著
- 13.市原地方史研究 14、17、18
- 14.房総諸藩録 須田茂著
- 15.迅速測図 (財)日本地図センター発行 691
- 16.千葉県市原市埋蔵文化財分布地図
- 17.公図・土地台帳(昭和62年1月1日) (株)創和
- 18.市原の百年写真集
- 19.鶴舞桜が丘いきいきマップ 鶴舞さくらの会、鶴舞商店会、鶴舞商業協同組合
- 20.上総市原 第14号 市原市文化財研究会
- 21.「鶴舞小百年のあゆみ」
- 22.伏谷如水伝 田口英爾著 平成22年